

この一件において、カミーユは女性部長というお偉いさんで、ジャッキーは女子社員。

カミーユは2人が働く会社でスピーチして欲しいとジャッキーに持ちかけた。そこで、ジャッキーは準備をした。彼女のスーツは小綺麗で、音の響きも言葉とうまく噛み合わされた。ひとつひとつの仕草と空間の中での動き方も慎重に決められた。見事なでき。完璧そのもので、ジャッキーは準備万端だった。

ところが、土壇場になって、あることのせいで最初の予定がボシャってしまった。

ほら、今そこにジャッキーが私たちの方へ向かってくる。フラッシュがパチパチと音を立て、ジャーナリストたちが聞き耳を立てる。ほら、マイクが花束みたいになってジャッキーに差し出され、彼女はそれを手に取る。マイクの花束に話すことは心に響くメッセージを伝えること。色とりどりのマイクがひと塊りになり、明瞭で真摯なメッセージに、若者たちに対するほとんど楽観的なメッセージに向けられる。ブルーのマイクがあり、それは一緒に新たな展望を見出すための個人的なメッセージを象徴している。ジャッキーは両手でマイクの花束をつかみ、それを最後には熱々のジャガイモのように聴衆に向かって投げ捨てるだろう。しかし、今そこで、私たちの前で、彼女はマイクの花束を鼻で嗅ぎ、唇は官能的にもフォームラバーの花弁に触れんばかり。

ジャッキーが話し始める。2枚の紙切れを演台代りに床の上に置き、唇はマイクにそっと触れ、強く息を吸い込むのが聞こえる。口元が開き、ジャッキーはカミーユが辞職すると発表する。スピーチをするはずだったジャッキーがカミーユの辞職を告げる。そう、カミーユは立ち去り、もはや部長というお偉いさんではなくなる。今すぐにも。ジャッキーはカミーユのために辞職したところ。今ではこれが普通で、誰かに自分のために辞職することを頼むことができる。そんなもので、不思議でも何でもない。

この発表のあとは蠅が飛ぶ音も聞こえそうな静けさ。人々は着席し、中には立ったままの人もいるが、誰もがちびちびと何か青いものを飲んでいる。それは空が飲み物に映り込んでいるからだ。

重苦しい沈黙のなか、ジャッキーが釈明する。「きのうの夜、22時半ごろ、何かが私に変化をもたらしました。カミーユが私に尋ねたのは、皆さんの前で、彼女のために私が辞職できるかということ。皆さんの前で彼女のために退職するという。彼女はデスクの下からそっと紙幣を渡してきましたが、それは、今晚、もっと効果をあげるため。今晚、スピーチの代わりに、私が仕事をやめ、床に横たわり、長々と寝そべり、それで彼女が窮地を脱して、一息つけるようにすること」

その時、カミーユが隣の人間にぶつかりながら立ち上がり、抗議する。カミーユはみんなの前で首にされるなんてとてもじゃないと声を張り上げる。でも、ジャッキーは何でこんなことをするのか？ いかれてるんじゃない、ジャッキー！ 何を考えてるの？

「ジャッキー「ねえカミーユ、おかしいのはあなたよ！ このひどい状況については話をしたでしょ。あなたが私を採用するけど、採用された私があなたを首にして、その結果、私は雇い主を失くし、どうすれば良いか分からなくなるっていうひどい状況。覚えてる？ ねえ、覚えてるの？ 私の作り話じゃないわよ。分かっているの？ 思い出した？ そして、《どんでん返し》の辞職を提案することで、力をつけて市場に戻って来ることを話したのも覚えてるでしょ。あなたの辞職の公表は会社を盛り立てることだけが目的で、会社は面目を一新し、様変わりしなければいけない。辞職って言うよりも、むしろ会社を立て直すことの方が問題だったでしょ。覚えてるの、電話してきたこと覚えてる？」

ここで、私たちの周りでパチパチと音を立てるフラッシュからも分かる通り、優れたコメンテーターである雇い主のカミーユが直接ジャッキーに話しかけるのが聞こえる。カミーユが言うには、ジャッキーはカミーユの注意をそらし、出し抜こうとしており、自分が辞職する前に彼女を追っ払おうとしている。

これに対してジャッキーは苛立ちながら、こう浴びせかける。「あなたは私を《誰もが必要とす

る Wi-Fi 人間》になぞらえて、あなたのためにスピーチすることを私に持ちかけた。私に言ったことをよく思い出して。

『Wi-Fi みたいな人は大勢いる Wi-Fi みたいな人はキャッチされる Wi-Fi みたいな人は取り替えがきく Wi-Fi みたいな人はいつもスピード不足 Wi-Fi みたいな人は問題を起こす

Wi-Fi みたいな人は接続が切れる でもジャッキー、あなたはこのスピーチのために私に必要な Wi-Fi 人間なの』

その上、Wi-Fi 人間は接続を辞退することもできるんだから。Wi-Fi 人間は接続へのアクセスを拒否することもできる。無効なパスワードって知ってる？ あなたが望んだのは《切断の中のつながり》。あなたはもう 辞職させられた」

ここで雇い主のカミーユは立ち去る。演台を離れ、カーテンを通り過ぎ、聴衆とリエットが塗られたトースト を後にする。

ージャッキーが遠くから大声で呼びかける。「そう言うことなの、もうやりたくないのね？ 聞いたでしょ、本当に真剣なのか、それとも映画を 1 本撮る間だけラッパーに職替えしたホアキン・フェニックス風のジョークじみた辞職願望なのかって？ そして今度こそ、うまく行きそうだった。と言うのも、この辞職はテーブル クロスの端を引っ張って、なみなみとワインが注がれた私たちのグラスをひっくり返す、そういう辞職だった から。一悶着ありそうだったのは、一時停止を無視すると、椅子に座っている人たちが地面に尻もちをつく ことになるから。ははは！誰かがおっこちるのはいつも笑わせてくれるけど、YouTube の爆笑おもしろ動画で言われてる通り《フォーム [ラバー]にご注意を》」

厄介ごとを引き起こしたのは誰か？ 知りたいのはそこ！ 始めたのはジャッキー。そう言ったのはジャッキー。そう言ったのはジャッキー。確かめるため、カメラの《人々》に一時停止して過去の映像を流すように頼んでみる。そこでゴー・バック・トゥ・ザ・パーストしてみると、スローモーションの映像を前にして、確かに反論の余地はない。始めたのはジャッキーだった。そう言ったのはジャッキーだった。フラッシュの パチパチいう音に囲まれ、ジャッキーがカミーユを辞職に追い込んだ。ばたん。

その結果、なんとも、ジャッキーはもはや止めどなく語り続ける。そして今では、なんとも、みんながそこ にいて、フラッシュがパチパチと音をたて、カメラが興奮で揺れ動いているもので、ジャッキーは今晚倒れる 2 番目のドミノ牌は私だと言添える。ジャッキーは話し続け、確かに何十億人もの Wi-Fi 人間によって形作られる緑色で光り輝く世界で倒れることを受け入れると言う。その世界では、私たちドミノ牌は 私たちを倒すのは誰かを知っているが、それまで何が私たちを直立状態に保ったのかは知らない。

ージャッキー「10 分と言う長い間続く、転倒を見ることになる。ほら、始まるわ。人差し指をポケットから出して、私は前に進む。最初のドミノ牌に狙いを付け、はじく。

まずはバラ模様のカミーユを倒し、次に協力者と呼ばれる男女の緑と白のスパイラルを。次に小さなビー玉が金融界の建物全体にぶち当たることになる。すべては 90 年代のダンスのリズムに乗って行われる。そして、ドミノでできた国旗が倒れることになる。頭が転がり落ち、ぶつかり、何もかもを倒す新たな衝撃を与える巧妙にできたシステムもある。言っとくけど、辞職は切断手術よ。ほら、いくつかの頭が、カミーユの 頭を手始めに、ピラミッドの天辺から転げ落ちようとしている」

この発表のあと、ジャッキーは息をつなぎ、なみなみと注がれた青い液体を飲み干す。滴がいくつかマイクの花束に落ちて音を立てる。ジャッキーは大きく息を吸い込み、咳払いをしたあと、こう言う。「カミーユは 追い詰められた。ホアキン・フェニックス風の『引退表明』をやりたかったと白状すべきだった。彼女はパフ

ォーマンズ的な退職がしたかったのに、本当にどん底に沈むためには勇気の石ころをポケットに

詰め込まなければならないことに気づいていなかった」

カミーユは追い詰められた。確かに彼女は金に物言わせて彼女の辞職のスポークスウーマンになることをジャッキーに頼んだ。カミーユはおっぴろげ出され、謝り、謝り、フラッシュを焚く私たちの前で今謝っている。カミーユはカーテンのうしろから出てきて、今では舞台の上にいる。彼女は床の2枚の紙の上に立っている。彼女は謝り、彼女の立場が問われている。周りगतバッチリを受けるが、おそらく同じようなケースがいくつか、中継を拒否する何人かのWi-Fi人間が、ピラミッドを揺るがすいくつかのドミノ牌が必要だろう。ぬかるみに何度か飛び込むことが、1足の丈夫なブーツが必要だろう。マイクの花束が何が起きているかをついに伝えるためには」

この支離滅裂な状況は終わりを迎え、何が何だか誰も分からなかった。めちゃくちゃそのものの大混乱で、ともかくも誰もがバッテリー切れだった。